特集

リテラシーの歴史研究
―日本の識字率―

八鍬 友広◎文
text by Tomohiro Yakuwa

江戸の識字率は世界一？

もしかすると、江戸時代の日本の識字率は、当時の世界にあってトップレベルだった、といったお話を聞いたことのある方がおられるのではないでしょうか。近代以前から日本の教育水準は高かった、そしてこれこそ、日本が欧米以外の国でいち早く近代化を達成できた理由である、といったようなお話です。確かに、各国の国勢を語る時にも、人口や言語、あるいはGDPなどと並んで識字率が示されることがあり、一般に識字率というものがそれぞれの国・地域のある種の強さと関係していると、考えられてもいるようです。

もちろん、教育の普及が、その国・地域の発展にとって重要であることは間違いないでしょう。しかし、識字率というものを、人口や種々の経済指標のような数値と同列視して、何かを正確に計り得る指標とみなすことには、慎重さが求められるのです。そもそも、何をもって「識字」とするかさえ、そう簡単に決められることではありません。ましてや、江戸時代の日本人の識字率などというものを、他の国や地域と比較可能なほどに正確に把握することなど、おそらく不可能というほかないでしょう。また、識字率の上昇が本当に産業化の進展をもたらすのかどうかについても、種々の議論があるのです。

私の研究では、このような識字というものが、日本の歴史の中でどのように展開してきたのかということについて、できるかぎり実証的に明らかにすることをめざしています。

リテラシーという比喩

ところで、近年、「リテラシー」という言葉をよく耳にするようになりました。学校教育に関与している人なら、聞いたことのない人はおそらくないでしょう。「数学的リテラシー」や「科学的リテラシー」などのように、従来なら学力と言ってきたようなものがリテラシーと呼ばれるようになってきました。一般社会においても、「情報リテラシー」「地図リテラシー」「セクシャル・リテラシー」など、いろいろなものがリテラシーと呼ばれています。

これらの言い方の共通性は、その地域に住んでいる人なら、誰もが持っていることが望ましい知識や技能を表しているということです。そのようなものを表現する言葉として「リテラシー」が使われるようになってきたということです。しかし、リテラシーのもともとの意味は、文字の読み書きに関する能力のことでした。近年になって、文字の読み書き以外のさまざまな能力・技能がリテラシーと呼ばれるようになってきたのは、それらの諸能力が、文字の読み書きができるのと同じように、誰もができた方がよいと考えられるからなのだと思います。つまり、文字の読み書きというものは、誰もができるものの代表選手とみなされているというわけです。

しかしながら、文字の読み書きは、人間が生得的に持っている能力ではありません。長い習練の末に、それはやっと可能となるものです。文字の歴史そのものも、五千年程度であり、彫刻などのような造形物が七万年もの歴史を有していることと比べれば、人類史においては、まだまだ新参者といわなければならないでしょう。ましてや、多くの人が文字の読み書きができるような社会など、ごく最近の出来事であり、地球規模でみれば、それはいまだ達成されていない課題であるとも言えるのです。

このような文字が、いったいどのようにして社会の中に普及していったのか。そして、いかにして文字の読み書きが、誰もが当たり前にできることとみなされるまでに至ったのか、そのことを少しでも明らかにしたいと思っています。

花押（かおう）を集める

リテラシーの歴史研究のために現在私が試している方法は、民衆が書いた花押を収集するというものです。欧米においては、識字率の歴史研究の史料として、教会に提出された婚姻署名などが使われています。自分の名前を書くことができる人は自分で署名して婚姻届を提出しますが、書くことのできない人は、署名のかわりに「＋」のマークを書き付けることが慣例となっていました。この婚姻署名によって、当時どれぐらいの人が自分の名前を書くことができたのかを確認できるというわけです。残念ながら近代以前の日本には、このような婚姻署名の制度はありませんでした。そのかわりとして私が注目しているのが花押です。

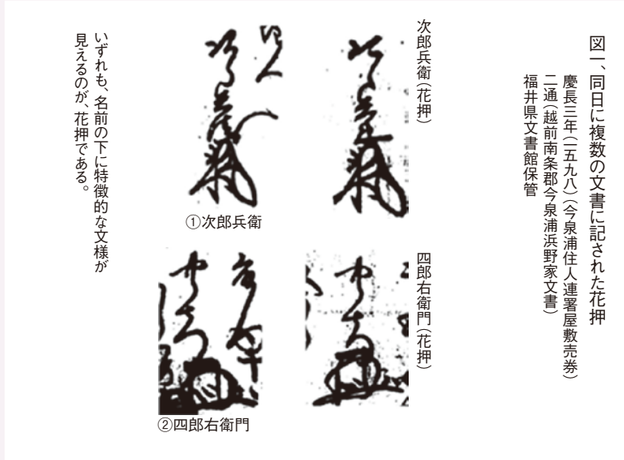
花押とは、一種のサインのようなものです。伊達政宗公の花押とか、有名な武将の花押など、皆さんも見たことがあるのではないでしょうか。実は花押は、このような著名な武将だけでなく、お百姓さんや商人など、一般庶民も書いていました。一般庶民が花押を書いたのは一七世紀前半までのことであり、それ以後は、この方法は使えません。それでも、花押が貴重な史料であることにかわりはありません。

図一は、一五九八年に交わされた証文に書かれた花押です。上半分に名前が、その下に花押が書かれています。通常このような文書では、名前を含む本文は村役人など特定の人が一人で書き、本人の署名が必要な場合に、名前の下に本人が花押を書きます。花押が書けない人は、「〇」や「一」などの印（略押）を書きつけます。この図の花押をご覧下さい。かなり複雑な文様です。この文書は、同一日に複数作成されました。図は、その両方に書かれた花押を並べたものですが、二つの花押がまったく同形であることがわかります。つまりこの人は、これほど複雑な文様を、繰り返し同じように書けたということです。これほどの運筆能力があれば、文字を書くことも充分に可能であったと思われます。

図二は、あるお寺の檀家さんたちが、一五九八年に署名した文書です。たくさんの丸印がみえます。これは、先ほど述べましたように、花押を書くことのできない人が、花押のかわりに丸印を書いたものです。二十三人が丸印を、六人が花押を記しています。つまり、この檀家さんたちのおよそ二割の人が、花押を書ける程度の流ちょうさで筆が使えたということがわかるわけです。

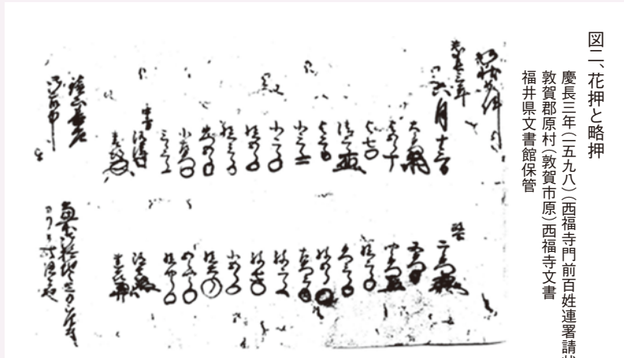
このようにして、さまざまな古文書から、ある年代のある村に、花押の書ける人がどれぐらいいるかを調べるというわけです。とても地味な作業ですが、近代以前の識字の広がりを知るための、数少ない、そして有力な方法といえるでしょう。

私を含む何人かの人が、この花押に着目して研究をしていますが、これらによって、一七世紀前半から、すでに一部の都市においては、男性の世帯主の大半が花押を記し得る状況であった一方、村落においては、ごく限られた人だけが花押を記し得る状況であったことなどが、分かってきています。これらの研究をさらに蓄積して、近代以前の日本における識字の分布状況を解明したいと思っています。



図一、同日に複数の文書に記された花押
慶長三年（一五九八）（今泉浦住人連署屋敷売券）
二通（越前南条郡今泉浦浜野家文書）
福井県文書館保管

いずれも、名前の下に特徴的な文様が見えるのが、花押である。



図二、花押と略押
慶長三年（一五九八）（西福寺門前百姓連署請状）
敦賀郡原村（敦賀市原）西福寺文書
福井県文書館保管

「〇」や「一」「二」「十」などは略押。上段右から一人目・四人目、下段右から一人目・三人目・左端の二人は、複雑な文様の花押を書いている。

八鍬 友広（やくわ ともひろ）
1960年生まれ
現職／東北大学大学院教育学研究科 教授
専門／教育学 日本教育史